『論語私存』訳注（十三）

水野　実・阿部光麿・大場一央・松野敏之　編

凡例

・底本は、北京市国家図書館蔵『四書私存』（明嘉靖二十二年刻本）を用いた。
・原文において判読出来ない字は□で表記した。
・書き下しにおいて、『論語』本文における□は〔　〕で示した。
・書き下しにおいて、季本注における□は、類推できる場合は〔　〕で示し、校異を附した。
・季本『説理会編』は、清華大学図書館蔵明馮継科刻本（四庫全書存目叢書所収）を用いた。
・校異および解釈には、朱湘鈺 点校、鍾彩鈞 校訂『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所、二〇一三年六月）を参考として用いた。

論語私存卷十五

會稽季本箋釋

衛靈公第十五

【一】

○衛靈公問陳於孔子。孔子對曰、俎豆之事、則嘗聞之矣。軍旅之事、未之學也。明日遂行。在陳絶糧。從者病、莫能興。子路慍見曰、君子亦有窮乎。子曰、君子固窮。小人窮斯濫矣。

俎豆之事、謂諸侯交隣國而燕饗交歡也。軍旅之事、謂列陳以戰。此則聖人誠有所未學焉。○在陳絶糧、即孟子盡心下篇所謂厄於陳蔡之間也。固窮、集註本何氏説。以文勢與上文亦有二字相應也。

［訓読］

○衛の霊公、陳を孔子に問ふ。孔子対へて曰く、俎豆の事は、則ち嘗て之を聞けり。軍旅の事は、未だ之を学ばざるなり、と。明日遂に行る。陳に在りて糧を絶つ。従者病みて、能く興つもの莫し。子路慍り見えて曰く、君子も亦た窮すること有りや。子曰く、君子固より窮す。小人は窮すれば斯に濫す。

俎豆の事は、諸侯の隣国と交はりて燕饗交歓するを謂ふ。軍旅の事は、陳を列ねて以て戦ふを謂ふ。此れ則ち聖人誠に未だ学ばざる所有り。○陳に在りて糧を絶つは、即ち孟子尽心下篇に所謂陳蔡の間に厄す、なり。固窮は、集註、何氏の説に本づく。文勢の上文の亦有の二字と相応ずるを以てなり。

［語釈］

○孟子盡心下篇　『孟子』尽心下に「君子の陳蔡の間に厄するは、上下の交はり無ければなり」とある。

○集註本何氏説　『論語集注』衛霊公・1章に「何氏曰く、濫は溢なり。言ふこころは君子固より窮する時有れども、小人の窮すれば則ち放溢して非を為すがごとくならず」と何晏の説が見え、続いて「程子曰く、固窮は固く其の窮を守る、と。亦た通ず」と、程頤の説も評価されている。

【二】

○子曰、賜也、女以予爲多學而識之者與。對曰、然。非與。曰、非也。予一以貫之。

多學而識、識亦有得於心、但未合一。故以識而應物、則未免物物刻雕。一則隨事而應、不待議擬於外矣。詳見説理會編卷五。○集註以孔子所告曾子子貢之一貫分知行、非精一之本旨也。辯見説理會編卷四。

［訓読］

○子曰く、賜や、女、予を以て多く学びて之を識る者と為すか。対へて曰く、然り。非なりや。曰く、非なり。予、一以て之を貫く。

多く学びて識る、識るも亦た心に得ること有るも、但だ未だ合一せず。故に識るを以てして物に応ずれば、則ち未だ物物刻雕するを免れず。一は則ち事に随ひて応じ、外に議擬するを待たず。詳しくは説

理会編巻五に見ゆ。○集註、孔子の曾子、子貢に告ぐる所の一貫を以て知行を分かつは、精一の本旨に非ざるなり。弁は説理会編巻四に見ゆ。

［語釈］

○詳見説理會編巻五　『説理会編』巻五・4条に「積累すること多くして後に心に得ること有る、是れを多く学びて識ると為す。識未だ不顕に至らざれば、則ち未だ声色を離れず、工夫は間断するの時有るを免れざれば、以て一と為るべからず」とあり、述而篇の「黙して之を識る」（2章）、「多く聞きて其の善なる者を択びて之に従ひ、多く見て之を識る」（27章）との異同についても論じている。

○集註～分知行　『論語集注』衛霊公・2章に、『論語』里仁・15章の曾子に告げた「吾が道は一以て之を貫く」と本章とを指して「彼は行を以て言ひ、此は知を以て言ふ」とある。

○辯見説理會編巻四　『説理会編』巻四・23条でも『論語集注』を引き、その上で「若し曾子を行上に得る所有り、子貢を知上に得る所有りと謂へば、則ち可なり。若し一貫に知行の分有りと謂へば、則ち不可なり。蓋し堯舜精一の伝は、惟だ此れのみ。故に本体より言へば、一にして精なる者は、誠なれば則ち明なり。功夫を以て言へば、精にして一なる者は、明なれば則ち誠なり。至誠無息、息有れば則ち便ち精ならず、以て一と為るべからざるのみ」とある。

【三】

○子曰、由、知德者鮮矣。

云知德、則以實有諸己而言矣。德有諸己、則其容貌辭氣之間、自無鄙暴矣。子貢得聞一貫、蓋庶幾可進於此焉。

［訓読］

○子曰く、由よ、德を知る者は鮮なし。

德を知ると云ふは、則ち実に諸(これ)を己に有するを以てして言ふ。德、諸を己に有すれば、則ち其の容貌辞気の間、自づから鄙暴無からん。子貢の一貫を聞くを得るは、蓋し此に進むべきに庶幾し。

［語釈］

○子貢得聞一貫　『論語』衛霊公・2章。

【四】

○子曰、無爲而治者、其舜也與。夫何爲哉。恭己正南面而已矣。

聖人之治、皆是德盛人化。而孔子獨以無爲而治稱舜者、非謂紹堯則無事可爲、得人則有臣任職也。蓋專以其成治功而言爾。古之聖人同一化民之德。然而能致治功之成者少矣。恐人疑爲治須有爲。故特舉舜言、以見無爲之果可以治也。

［訓読］

○子曰く、無為にして治まる者は、其れ舜なるか。夫れ何をか為さんや。己を恭しくして正しく南面するのみ。

聖人の治は、皆是れ徳盛んにして人化す。而して孔子独り無為にして治まるを以て舜を称ふる者は、堯を紹げ（つ）ば則ち事の為すべき無く、人を得れば則ち臣の職に任ずる有るを謂ふに非ざるなり。蓋し専ら其の治功を成すを以てして言ふのみ。古の聖人は同じく民を化するの徳を一にす。然り而して能く治功の成るを致す者は少なし。恐らくは人、治を為すは須らく為すこと有るべしと疑ふ。故に特に舜を挙げて言ひて、以て無為の果たして以て治むべきを見（しめ）すなり。

【五】

○子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。

見人則起、出外則乗車。皆以其接物言也。參於前者人、倚於衡者身、其所見者、忠信篤敬也。能行之本在此。子張雖不能如顔冉之請事斯語、然書紳一事亦庶幾接目警心矣。故子張晩年工夫造於切實之地、如士見危授命、執徳不弘諸章所言、則可見矣。

［訓読］

○子張、行はれんことを問ふ。子曰く、言、忠信、行、篤敬なれば、蛮貊の邦と雖も行はれん。言、忠信ならず、行、篤敬ならざれば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其の前に参ずるを見る。輿に在れば則ち其の衡に倚るを見る。夫れ然る後に行はれん、と。子張、諸(これ)を紳に書す。

人を見れば則ち起ち、外に出づれば則ち車に乗る。皆其の物に接するを以て言ふ。前に参ずる者は人、衡に倚る者は身、其の見る所の者は、忠信篤敬なり。能く行はるるの本は此に在り。子張、顔冉の請ふ斯の語を事とせんのごとくなること能はずと雖も、然れども紳に書するの一事も亦た目に接し心に警むるに庶幾し。故に子張の晩年の工夫は切実の地に造(いた)り、士は危ふきを見ては命を授く、徳を執ること弘からずの諸章に言ふ所のごときは、則ち見るべし。

［語釈］

○顔冉之請事斯語　『論語』顔淵・1章にて顔子淵が、顔淵・2章にて冉仲弓が、孔子に教えを受けていずれも「不敏なりと雖も請ふ斯の語を事とせん」と発言している。

○士見危授命　『論語』子張・1章。

○執徳不弘　『論語』子張・2章。

［校異］

○皆以其接物言也　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「以」を「公」に作る。

【六】

○子曰、直哉、史魚。邦有道如矢、邦無道如矢。君子哉、蘧伯玉。邦有道則仕、邦無道則可卷而懐之。

史魚之直亦出誠心。故孔子取之。但不若蘧伯玉合於君子之道耳。由此觀之、則伯玉固學聖學者也。

［訓読］

○子曰く、直なるかな、史魚。邦に道有るも矢のごとく、邦に道無きも矢のごとし。君子なるかな、蘧伯玉。邦に道有れば則ち仕へ、邦に道無ければ則ち巻きて之を懐にすべし。

史魚の直も亦た誠心に出づ。故に孔子、之を取る。但だ蘧伯玉の君子の道に合するに若かざるのみ。

此に由りて之を観れば、則ち伯玉は固に聖学を学ぶ者なり。

【七】

○子曰、可與言而不與之言、失人。不可與言而與之言、失言。知者不失人、亦不失言。

此全係乎是非之心明、而有知人之鑑也。

［訓読］

○子曰く、与に言ふべくして之と言はざれば、人を失ふ。与に言ふべからずして之と言へば、言を失ふ。知者は人を失はず、亦た言を失はず。

此れ全く是非の心明らかにして、人を知るの鑑有るに係る。

【八】

○子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。

志士雖未成徳、亦求仁者也。求生害仁、是其心所不安也。程子曰、實理得之於心、生不安於死。其言切矣。

［訓読］

○子曰く、志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無く、身を殺して以て仁を成すこと有り。

志士は未だ徳を成さずと雖も、亦た仁を求むる者なり。生を求め仁を害するは、是れ其の心の安からざる所なり。程子曰く、実理之を心に得れば、生は死よりも安からず、と。其の言、切なり。

［語釈］

○程子曰～生不安於死　『論語集注』衛霊公・8章に引く程子語を約めたもの。

【九】

○子貢問為仁。子曰、工欲善其事、必先利其器。居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者。

子貢嘗遊諸侯之國、恐其所至之地、悦不若己者。故以親賢取友告之。而曰居是邦也、則隨所往而無不然矣。黄勉齋曰、大夫言賢、已見於行事者也。士言仁、方見於脩身者也。

［訓読］

○子貢、仁を為すを問ふ。子曰く、工、其の事を善くせんと欲すれば、必ず先ず其の器を利くす。是の邦に居るや、其の大夫の賢者に事へ、其の士の仁者を友とす。

子貢嘗て諸侯の国に遊ぶに、其の至る所の地、己に若かざる者を悦ぶを恐る。故に賢に親しみ友を取るを以て之に告ぐ。而も是の邦に居るやと曰ふは、則ち往く所に随ひて然らざること無かれ、となり。黄勉斎曰く、大夫の賢と言ふは、已に事を行ふに見はるる者なり。士の仁と言ふは、方に身を脩むるに見はるる者なり、と。

［語釈］

○黄勉斎曰～方見於脩身者也　『論語集註大全』衛霊公・9章。

［校異］

○故以親賢取友告之　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「故」を欠く。

【十】

○顔淵問為邦。子曰、行夏之時、乗殷之輅、服周之冕、樂則韶舞。放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆。

行夏之時、非謂改正朔也。蓋以夏時節令、民事具焉、當實舉行之。如堯典所謂允釐也。即此一語、敬授民時之道盡於此矣。殷輅朴素、出則人所共見、乗此可以示朴也。冕以章德、周制尤爲華美、服之可以勸

有位也。韶樂盡善盡美、用之可以和人心也。輅冕樂、自虞夏至周、必皆通行、各舉其一也。放鄭聲、恐其導淫也。遠佞人、恐其亂正也。此皆治民之切務、雖諸侯亦當如此。不必專以爲治天下之事、而爲邦之問、爲謙辭也。但治民之本、則顔子已備。故舉禮樂之當見於設施者言之耳。

［訓読］

○顔淵、邦を為(をさ)むるを問ふ。子曰く、夏の時を行ひ、殷の輅に乗り、周の冕を服し、楽は則ち韶舞。鄭声を放ちて、佞人を遠ざく。鄭声は淫に、佞人は殆ふし。

夏の時を行ふは、正朔を改むるを謂ふに非ざるなり。蓋し夏の時の節令、民事具はれるを以て、当に実に之を挙行すべし。堯典に所謂允釐のごとし。此の一語に即けば、敬して民に時を授くるの道、此に尽きたり。殷の輅は朴素にして、出づれば則ち人の共に見る所にして、此に乗れば以て朴を示すべし。冕は以て徳を章らかにし、周制尤も華美たりて、之を服(かぶ)れば以て位有るを勧むべし。韶楽は善を尽くし美を尽くし、之を用ふれば以て人心を和すべし。輅、冕、楽は、虞、夏より周に至るまで、必ず皆通行し、各おの其の一を挙ぐ。鄭声を放つは、其の淫を導くを恐るればなり。佞人を遠ざくるは、其の正を乱すを恐るればなり。此れ皆民を治むるの切務にして、諸侯と雖も亦た当に此くのごとくなるべし。必ずしも専ら以て天下を治むるの事と為さずして、邦を為むるを之れ問ふは、謙辞を為せばなり。但だ民を治むるの本は、則ち顔子已に備はれり。故に礼楽の当に設施に見はるるべき者を挙げて之を言ふのみ。

［語釈］

○堯典所謂允釐　『書経』堯典に「允(まこと)に百工を釐(をさ)め、庶績咸熙(おこ)る」とある。
○韶樂盡善盡美　『論語』八佾・25章。

［校異］

○恐其導淫也　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「導」を「道」に作る。

【十一】

○子曰、人無遠慮、必有近憂。

蔡覺軒、饒雙峰皆謂、蘇氏説遠近止以地言、須兼時言、其意方足。此亦可通。

［訓読］

○子曰く、人遠き慮り無ければ、必ず近き憂ひ有り。

蔡覚軒、饒双峰皆謂へらく、蘇氏の遠近を説きて止だ地を以て言ふは、時を兼ねて言ふを須(ま)ちて、其の意方(はじ)めて足らん、と。此れも亦た通ずべし。

［語釈］

○蔡覺軒饒雙峰～其意方足　『論語集註大全』衛霊公・11章。『論語集注』同章に「蘇氏曰く、人の履む所の者は、足を容るるの外は皆無用の地たるも、廃すべからず。故に慮り千里の外に在らざれば、則ち患ひは几席の下に在り」との蘇軾の説が見え、蔡覚軒は「蘇氏の説を按ずるに、遠

近を説くに地を以て言ふ。若し遠近、時を以て言ふも、恐らくは亦た通ずべし」、饒双峰は「蘇氏只だ地の遠近を説き得て、時の遠近を説くを欠く。若し慮り千百年の遠きに及ばざれば、則ち患ひ旦夕の近きに在らんと云へば、意方めて足らん」と指摘している。

【十二】

○子曰、已矣乎。吾未見好德如好色者也。

此語已見子罕篇。此加已矣乎三字、則意更切耳。蓋必顔子死後之言。

［訓読］

○子曰く、已んぬるかな。吾未だ徳を好むこと色を好むがごとくなる者を見ざるなり。

此の語已に子罕篇に見る。此に已矣乎の三字を加ふれば、則ち意更に切なるのみ。蓋し必ず顔子の死後の言ならん。

［語釈］

○此語已見子罕篇　『論語』子罕・17章。

【十三】

○子曰、臧文仲其竊位者與。知柳下惠之賢、而不與立也。

饒雙峰謂、臧文仲自居上位、亦自有所長。若與柳下惠並立、便被他形出己之短。所以蔽而不進。此言深得蔽賢者之情状。文仲與公叔文子薦大夫僎同升諸公者不同。故孔子以爲竊位、可以見仁人惡媚嫉之本心者矣。

［訓読］

○子曰く、臧文仲は其れ位を窃む者か。柳下恵の賢を知りて、与に立たざるなり。

饒双峰謂へらく、臧文仲は自ら上位に居り、亦た自ら長とする所有り。若し柳下恵と並び立てば、便ち他に己の短を形出せられん。所以に蔽ひて進めず、と。此の言、深く賢を蔽ふ者の情状を得たり。文仲は公叔文子の大夫僎を薦めて同じく諸(これ)を公に升せしむる者と同じからず。故に孔子以て位を窃むと為すは、以て仁人の媚嫉を悪むの本心を見すべき者なり。

［語釈］

○饒雙峰謂～所以蔽而不進　『論語集註大全』衛霊公・13章。

○公叔文子薦大夫僎同升諸公　『論語』憲問・19章。

【十四】

○子曰、躬自厚、而薄責於人、則遠怨矣。

朱子曰、厚是責了又責、自責不已之意。新安陳氏曰、非爲求遠怨而爲之。遠怨乃自然之效也。此二説者

皆得此章本旨。

［訓読］

○子曰く、躬自ら厚くして、人を責むるに薄ければ、則ち怨みに遠ざかる。

朱子曰く、厚は是れ責め了りて又た責め、自ら責めて已まざるの意なり。新安陳氏曰く、怨みに遠ざかるを求むる為に之を為すに非ず。怨みに遠ざかるは乃ち自然の効なり。此の二説は皆此の章の本旨を得たり。

［語釈］

○朱子曰～自責不已之意　『論語集註大全』衛霊公・14章。

○新安陳氏曰～自然之效也　『論語集註大全』衛霊公・14章。

【十五】

○子曰、不曰如之何、如之何者、吾末如之何也已矣。

如之何、集註解爲熟思審處、猶云繹也。子罕篇云、説而不繹、吾末如之何也已矣。即此意。

［訓読］

○子曰く、之を如何せん、之を如何せんと曰はざる者は、吾之を如何ともすること末(な)きのみ。

之を如何せん、集註解して熟思して審処すと為すは、猶ほ繹と云ふがごとし。子罕篇に云く、説びて

繹ねざるは、吾、之を如何ともすること末きのみ、と。即ち此の意なり。

［語釈］

○集註解爲熟思審處　『論語集注』衛霊公・15章。

○子罕篇云　『論語』子罕・23章。

【十六】

○子曰、群居終日、言不及義、好行小慧。難矣哉。

言不及義、而好行小慧、則群居之所爲皆計較傾邪之事耳。故南軒張氏曰、義者天理之公、小慧則謬巧之私而已。小慧之好、義之賊也。

［訓読］

○子曰く、群居して終日、言、義に及ばず、好みて小慧を行ふ。難いかな。

言、義に及ばずして、好みて小慧を行へば、則ち群居の為す所は皆計較傾邪の事のみ。故に南軒張氏曰く、義は天理の公、小慧は則ち謬巧の私のみ。小慧を之れ好むは、義の賊なり、と。

［語釈］

○南軒張氏曰～義之賊也　『論語集註大全』衛霊公・16章。

【十七】

○子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之。君子哉。

此以制事言。故主於義。義者、剛決無所牽纏也。義之行處是禮。無禮則不文、而率於行。義之出處是孫。無孫則不順、而滞於出。義之成處是信。無信則不實、而苟於成。君子之制事如此、一本於天理之正而已。此其所以爲君子歟。禮孫猶言禮樂。蓋文之以禮樂、亦可以爲成人之意。不言仁智者、義禮孫信皆仁智之存於心者也、以応事言。故不及仁智耳。

［訓読］

○子曰く、君子、義以て質と為し、礼以て之を行ひ、孫以て之を出だし、信以て之を成す。君子なるかな。

此れ事を制するを以て言ふ。故に義を主とす。義は、剛く決して牽纏する所無し。義の行ふ処は是れ礼なり。礼無ければ則ち文ならずして、行に率ゐらる。義の出づる処は是れ孫なり。孫無ければ則ち順ならずして、出だすに滞る。義の成る処は是れ信なり。信無ければ則ち実ならずして、成すに苟(いやしく)もす。君子の事を制すること此くのごとく、一に天理の正に本づくのみ。此れ其の君子たる所以なるかな。礼孫は猶ほ礼楽と言ふがごとし。蓋し之を文るに礼楽を以てすれば、亦た以て成人と為すべし、の意なり。仁智を言はざる者は、義、礼、孫、信は皆仁智の心に存する者にして、事に応ずるを以て言へばなり。故に仁智に及ばざるのみ。

［語釈］

○文之以禮樂～爲成人之意　『論語』憲問・13章。

【十八】

○子曰、君子病無能焉。不病人之不己知也。

此與前篇不患人之不己知、患其不能也同意。

［訓読］

○子曰く、君子は能くすること無きを病ふ。人の己を知らざるを病へず。

此れ前篇の人の己を知らざることを患へず、其の能くせざるを患ふと意を同じくす。

［語釈］

○前篇　『論語』憲問・32章。

【十九】

○子曰、君子疾沒世而名不稱焉。

稱、當讀去聲。傳習錄已明辯之矣。

［訓読］

○子曰く、君子は世を没して名の称(かな)はざるを疾む。

称は、当に去声に読むべし。伝習録已に之を明弁せり。

［語釈］

○稱當讀去聲　平声の「称ふ」の意ではなく、去声の「称ふ」と解することを示している。

○傳習錄已明辯之矣　『論語集注』に拠れば訓読は「君子は世を没するまで名の称せられざるを疾む」となるのに対して、『伝習録』巻上・107条に「称字は去声に読む。亦た声聞の情に過ぐるは君子、之を恥づ、の意なり。実の名に称はざるは、生けるときは猶ほ補ふべし。没すれば則ち及ぶ無し」とある。

【二十】

○子曰、君子求諸己、小人求諸人。

邢氏曰、求、責也。

［訓読］

○子曰く、君子は諸を己に求め、小人は諸を人に求む。

邢氏曰く、求は、責なり、と。

［語釈］

○邢氏曰求責也　『論語注疏』衛霊公・本章の疏。

【二十一】

○子曰、君子矜而不爭、群而不黨。

南軒張氏曰、矜莊自持、易至絶物而失於爭。群居相與、易至徇物而失於黨。君子非與人異也。處己嚴而不失於和、故矜而不爭。非不與人同也。待物平而不失於公、故群而不黨。此説得之。

［訓読］

○子曰く、君子は矜にして争はず、群して党せず。

南軒張氏曰く、矜莊にして自ら持するは、物を絶ちて争に失するに至り易し。群居して相与にするは、物に徇ひて党に失するに至り易し。君子は人と異なるに非ざるなり。己を処すること厳にして和に失せず、故に矜にして争はず。人と同じからざるに非ざるなり。物に待すること平らかにして公に失せず、故に群して党せず、と。此の説、之を得たり。

［語釈］

○南軒張氏曰～故群而不黨　『論語集註大全』衛霊公・21章。

【二十二】

○子曰、君子不以言舉人、不以人廢言。

新安陳氏之説可取。

［訓読］

○子曰く、君子は言を以て人を挙げず、人を以て言を廃せず。

新安陳氏の説取るべし。

［語釈］

○新安陳氏之説　『論語集註大全』衛霊公・22章には「孔子の宰予の昼寝ぬるに因りて言を聴くには必ず行ひを観る、孟子の陽貨の富を為さんとすれば仁ならずの言を没せざるがごときは、聖賢の心、公にして蔽はるる無きが故に此くのごとし」と、孔子の宰予評（『論語』公冶長・9章）、孟子の陽貨（陽虎）評（『孟子』滕文公上・3章）を本章の具体例として挙げる。

【二十三】

○子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。

此不言忠、忠在勿施上。朱子曰、不忠不成恕。説恕時、忠在裏面了。

［訓読］

○子貢問ふて曰く、一言にして以て身を終ふるまで之を行ふべき者有りや。子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。

此れ忠を言はざるも、忠、勿施の上に在り。朱子曰く、忠ならざれば恕を成さず。恕を説く時、忠は裏面に在り了れり、と。

［語釈］

○朱子曰～忠在裏面了　『論語集註大全』衛霊公・23章。

【二十四】

○子曰、吾之於人也、誰毀誰譽。如有所譽者、其有所試矣。斯民也、三代之所以直道而行也。

毀、害也。譽、與之也。此章集註極得本旨。善其善、惡其惡、二其字指善惡之本然者而言。無所私曲、是三代所行之直道也。以民心本公故三代用之、以行直道。在位者則有賞罰、在下者則有褒貶、皆直道也。所以二字、因民字言。朱子曰、所以二字本虚、然意味乃在此。須識此意。○張南軒説可毀可譽在彼、與集註不同、今無所取。

［訓読］

○子曰く、吾の人に於けるや、誰をか毀り誰をか誉めん。如し誉むる所有る者は、其れ試みる所有り。斯の民は、三代の直道にして行ふ所以なり。

毀は、害なり。誉は、之に与（くみ）するなり。此の章、集註極めて本旨を得たり。其の善を善とし、其の悪を悪とす、二つの其字は善悪の本より然る者を指して言ふ。私曲する所無きは、是れ三代の行ふ所の直

道なり。民心本より公なるを以ての故に三代之を用ひて、以て直道を行ふ。位に在る者は則ち賞罰有り、下に在る者は則ち褒貶有るは、皆直道なり。所以の二字は、民字に因りて言ふ。朱子曰く、所以の二字は本より虚なるも、然れども意味は乃ち此に在り、と。須らく此の意を識るべし。○張南軒、毀るべく誉むべきは彼に在りと説くは、集註と同じからず、今は取る所無し。

［語釈］

○集註極得本旨　『論語集注』衛霊公・24章に「言ふこころは吾の毀誉する所無き所以は、蓋し此の民は即ち三代の時、其の善を善とし、其の悪を悪とする所以にして、私曲する所無きの民なるを以ての故に我今亦た得て其の是非の実を枉げざればなり」とあり、季本の所謂「二つの其字」はこの文に基づく。

○朱子曰～然意味乃在此　『論語集註大全』衛霊公・24章。

○張南軒説可毀可譽在彼　『論語集註大全』衛霊公・24章。

【二十五】

○子曰、吾猶及史之闕文也、有馬者借人乘之。今亡已夫。

史闕文以待來者、不挾己見以自是也。馬借人、謂以馬之餘者借人乘車也、此齊氏説。則乘當去聲。與朱子異矣。

［訓読］

○子曰く、吾猶ほ史の文を闕き、馬有る者は人に乗を借すに及ぶ。今は亡きかな。

史は文を闕きて以て来者を待ち、己の見を挾みて以て自ら是とせざるなり。馬、人に借すとは、馬の余れる者を以て人の乗車に借すを謂ふ、此れ斉氏の説なり。則ち乗は当に去声なるべし。朱子と異なれり。

［語釈］

○馬借人～與朱子異矣　『論語集註大全』衛霊公・25章に「斉氏曰く、三代に馬に乗る者無し」として、本文の「乗」を「四頭だての馬車」（去声の用法）と解する説が見える。『論語集注』同章では「乗る」（平声）と解され、訓読は「馬有る者は人に借して之に乗らしむ」となる。

【二十六】

○子曰、巧言亂德。小不忍、則亂大謀。

巧言、自文者也。小不忍、姑息者也。巧言者無德、而足以亂人之德。小不忍者無謀、而足以亂人之大謀。不忍者、不忍人之心也。集註以匹夫之勇言之、於義不協。

［訓読］

○子曰く、巧言は徳を乱る。小、忍びざれば、則ち大謀を乱る。

巧言は、自ら文る者なり。小、忍びずとは、姑息なる者なり。巧言なる者は徳無くして、以て人の徳を乱すに足る。小、忍びざる者は謀無くして、以て人の大謀を乱すに足る。忍びずとは、人に忍びざるの心なり。集註の匹夫の勇を以て之を言ふは、義に於て協(かな)はず。

［語釈］

○不忍人之心　『孟子』公孫丑上・6章。

○集註以匹夫之勇言之　『論語集注』衛霊公・26章に「小、忍びずとは、婦人の仁、匹夫の勇のごとき、是れなり」とある。

［校異］

○於義不協　底本は「協」を「恊」に作る。『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に拠って改めた。

【二十七】

○子曰、衆惡之必察焉、衆好之必察焉。

雙峰饒氏曰、齊人皆以仲子爲廉、孟子獨能辯其不廉。此其衆好必察處。匡章通國皆稱不孝、孟子獨不以不孝目之。此是衆惡必察處。又曰、衆好惡固當察。然我心無私意、方能察之。若有私意、則衆好惡之得其當者、我反以爲非矣。所以惟仁者能好惡人也。此説明盡。

［訓読］

○子曰く、衆、之を悪むも必ず察し、衆、之を好むも必ず察す。

双峰饒氏曰く、斉人皆仲子を以て廉と為すも、孟子独り能く其の廉ならざるを弁ず。此れ其の衆好むも必ず察する処なり。匡章は通国皆不孝と称するも、孟子独り不孝を以て之を目せず。此れは是れ衆悪むも必ず察する処なり、と。又た曰く、衆の好悪は固より当に察すべし。然れども我が心に私意無くして、方(はじ)めて能く之を察す。若し私意有れば、則ち衆の好悪の其の当を得る者、我反つて以て非と為さん。惟だ仁者のみ能く人を好悪する所以なり、と。此の説、明らかにし尽くせり。

［語釈］

○雙峰饒氏曰～所以惟仁者能好悪人也　『論語集註大全』衛霊公・25章。

○齊人皆～孟子獨能辯其不廉　『孟子』滕文公下・10章。

○匡章通國皆～孟子獨不以不孝目之　『孟子』離婁下・30章。

○惟仁者能好悪人也　『論語』里仁・3章に「唯だ仁者のみ、能く人を好み、能く人を悪む」とある。

【二十八】

○子曰、人能弘道。非道弘人。

道者、人之所以爲人也。道大則人亦大。道豈不能弘人哉。但於事上求道、則爲義襲、故不能弘耳。○張子謂、心能盡性、人能弘道也。性不知檢其身、非道弘人也。此言未是。蓋自心而言、則其知覺之靈即性也。故謂之人心有覺、道體無爲、則可。謂心能盡性、性不知檢其身、則不可。人心所覺、非性而何。性而不知、孰能知之。但流行而爲道、則發動之機、勢不可遏、乃入於無爲耳。若合性而言、則有爲之覺、乃在無爲之中。而可謂道別有一氣象耶。

［訓読］

○子曰く、人能く道を弘む。道の人を弘むるに非ず。

道は、人の人たる所以なり。道大なれば則ち人も亦た大なり。道豈に人を弘むること能はざらんや。但だ事上に於て道を求むれば、則ち義の襲ふと為す、故に弘むること能はざるのみ。○張子謂へらく、心、能く性を尽くせば、人能く道を弘む。性、其の身を検することを知らざれば、道の人を弘むるに非ざるなり、と。此の言未だ是ならず。蓋し心よりして言へば、則ち其の知覚の霊なるは即ち性なり。故に之を人心に覚る有りて、道体に為すこと無しと謂へば、則ち可なり。心は能く性を尽くし、性は其の身を検するを知らずと謂へば、則ち不可なり。人心の覚る所、性に非ずして何ぞや。性にして知らざれば、孰か能く之を知らん。但だ流行して道と為れば、則ち発動の機、勢として遏むべからず、乃ち為すこと無きに入るのみ。若し性を合して言へば、則ち為すこと有るの覚は、乃ち為すこと無きの中に在り。而して道に別に一気象有りと謂ふべきか。

［語釈］

○張子謂～非道弘人也　『論語集注』衛霊公・28章。

［校異］

○可謂道別有一氣象邪　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「邪」を「耶」に作る。

【二十九】

○子曰、過而不改是謂過矣。

聖人汲汲欲人改過、正恐其不及改也。

［訓読］

○子曰く、過ちて改めざるを是れ過ちと謂ふ。

聖人、人の過ちを改めんことを欲するに汲汲たるは、正に其の改むるに及ばざるを恐るればなり。

【三十】

○子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢以思。無益、不如學也。

李氏謂孔子非思而不學者也。惟張横渠以爲煞喫辛苦來。蓋聖人當其始學亦嘗苦思。故其言如此。思是懸想、學是實踐、説見爲政篇。

［訓読］

○子曰く、吾嘗て終日食らはず、終夜寝ねずして以て思ふ。益無し、学ぶに如かざるなり。

李氏、孔子を思ひて学ばざる者に非ずと謂ふ。惟だ張横渠のみ以為へらく煞(まこと)に辛苦を喫し来たる、と。蓋し聖人其の学を始むるに当たりて亦た嘗(つね)に苦思せり。故に其の言此くのごとし。思は是れ懸想、学は是れ実践、説は為政篇に見ゆ。

［語釈］

○李氏謂孔子非思而不學者也　『論語集注』衛霊公・30章に「李氏曰く、夫子は思ひて学ばざる者に非ず。特だ語を垂れて以て人を教ふるのみ」とある。『論語』為政・15章「思ひて学ばざれば則ち殆ふし」を踏まえた語。

○惟張横渠以爲煞喫辛苦來　『論語集註大全』衛霊公・30章に「惟だ張横渠のみ此の意を知り得て、嘗に孔子煞に辛苦を喫し来たると言ふ」。

○説見爲政篇　『論語私存』為政・15章（「『論語私存』訳注（二）」）参照。

【三十一】

○子曰、君子謀道不謀食。耕也、餒在其中矣。學也、祿在其中矣。君子憂道不憂貧。

此章言君子專於求道、自有得祿之理。却推君子之心不爲憂貧而學、以見其專於爲道也。

［訓読］

○子曰く、君子は道を謀りて食を謀らず。耕すや、餒其の中に在り。学ぶや、禄其の中に在り。君子は道を憂へて貧しきを憂へず。

此の章、君子の道を求むるに専らにして、自づから禄を得るの理有るを言ふ。却つて君子の心を推して貧しきを憂へて学ぶと為さずして、以て其の道を為すに専らなるを見すなり。

【三十二】

○子曰、知及之、仁不能守之、雖得之、必失之。知及之、仁能守之、不莊以涖之、則民不敬。知及之、仁能守之、莊以涖之、動之不以禮、未善也。

此章以君德言、而推之以致其極也。知及而仁又能守、則德成矣。然未至於奏假無言之地、則莊不足以化民。莊以涖之、而動民不以禮、則處之不能曲盡、豈可以言篤恭哉。其次第如此。

［訓読］

○子曰く、知、之に及ぶも、仁、之を守ること能はざれば、之を得と雖も、必ず之を失ふ。知、之に及び、仁能く之を守れども、莊以て之に涖(のぞ)まざれば、則ち民敬せず。知、之に及び、仁能く之を守り、莊以て之に涖めども、之を動かすに礼を以てせざれば、未だ善ならざるなり。

此の章、君の德を以て言ひて、之を推して以て其の極を致すなり。知及びて仁又た能く守らば、則ち

徳成らん。然れども未だ奏仮無言の地に至らざれば、則ち荘、以て民を化するに足らず。荘以て之に蒞めども、民を動かすに礼を以てせざれば、則ち之に処するに曲さに尽くすこと能はず、豈に以て篤恭を言ふべけんや。其の次第此くのごとし。

［語釈］

○奏假無言　『中庸』に「詩に曰く、奏(すす)み仮(いた)りて言無く、時に争ひ有ること靡し、と。是の故に君子は賞せずして民勧み、怒らずして民、鈇鉞よりも威(おそ)る」とある。

○豈可以言篤恭哉　『中庸』の「君子篤恭にして天下平らかなり」を踏まえる。

【三十三】

○子曰、君子不可小知、而可大受也。小人不可大受、而可小知也。

君子以德成者、用心於立大本、則不爲私欲所蔽、而虛能受人、知不必皆己出也。故曰、可大受也。小人以藝成者、用其私智。但於事物上有所知識、而非用中之大智。故曰、可小知也。君子不器、而籩豆之事則有司存。蓋謂此耳。

［訓読］

○子曰く、君子は小知すべからずして、大受すべし。小人は大受すべからずして、小知すべし。

君子、徳を以て成る者は、心を大本を立つるに用ふれば、則ち私欲の蔽ふ所と為らずして、虚に能く

人を受け、知は必ずしも皆己より出でざるなり。故に曰く、大受すべし、と。小人、藝を以て成る者は、其の私智を用ふ。但だ事物上に於て知り識る所有るのみにして、中の大智を用ふるに非ず。故に曰く、小知すべし、と。君子は器ならずして、籩豆の事は則ち有司存す。蓋し此を謂ふのみ。

［語釈］

○君子不器　『論語』為政・12章。

○籩豆之事則有司存　『論語』泰伯・4章。

【三十四】

○子曰、民之於仁也、甚於水火。水火、吾見蹈而死者、未見蹈仁而死者也。

潛室陳氏曰、蹈仁有益無害。人何憚而不爲。此勉人爲善之語。若到殺身成仁處、是時不管利害、但求一箇是而已。學者患不蹈仁爾。蹈仁則心無計較之私。若義所當死而死、雖比干不害爲正命。此説足以發未盡之意。

［訓読］

○子曰く、民の仁に於けるや、水火よりも甚だし。水火は、吾蹈みて死する者を見るも、未だ仁を蹈みて死する者を見ざるなり。

潛室陳氏曰く、仁を蹈むは益有りて害無し。人何ぞ憚りて為さざらん。此れ人を勉(はげ)まして善を為さし

むるの語なり。若し身を殺して仁を成すの処に到れば、是の時利害に管せず、但だ一箇の是を求むるのみ。学者は仁を蹈まざるを患ふるのみ。仁を蹈めば則ち心に計較の私無し。若し義の当に死すべき所にして死すれば、比干と雖も正命と為すを害はず、と。此の説以て未だ尽くさざるの意を発するに足る。

［語釈］

○潛室陳氏曰～雖比干不害爲正命　『論語集註大全』衛霊公・34章。

○殺身成仁　『論語』衛霊公・8章。

○正命　『孟子』尽心上・2章に「其の道を尽くして死する者は正命なり」とあるのを踏まえる。

［校異］

○吾見蹈而死者　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「吾見蹈而死者矣」に作る。

【三十五】

○子曰、當仁不讓於師。

朱子曰、此與上章皆勉人爲仁之辭。上章爲凡民都不知仁、而憚於爲之者發。此章爲學者粗知仁之爲美、而不知勇於有爲者發。

［訓読］

○子曰く、仁に当たりては、師にも譲らず。

朱子曰く、此れと上章と皆人を勉(はげ)まして仁を為さしむるの辞なり。上章は凡そ民都(みな)仁を知らずして、之を為すを憚る者の為に発す。此の章は学者の粗(ほぼ)仁の美たるを知るも、為すこと有るに勇なるを知らざる者の為に発す、と。

［語釈］

○朱子曰～不知勇於有爲者發　『論語集註大全』衛霊公・35章。

［校異］

○○子曰　底本は本章冒頭の圏を欠く。前章と接続する意図は見えず、前後の体裁に倣って補った。

【三十六】

○子曰、君子貞而不諒。

諒、小信也。此孟子離婁下篇所謂言不必信、惟義所在之意。有貞字爲主、方可言不諒。

［訓読］

○子曰く、君子は貞にして諒ならず。

諒は、小信なり。此れ孟子離婁下篇に所謂言必ずしも信ならず、惟だ義の在る所のままなり、の意なり。貞字有るを主と為して、方(はじ)めて諒ならずと言ふべし。

［語釈］

○孟子離婁下篇所謂　『孟子』離婁下・11章に「大人は、言必ずしも信ならず、行必ずしも果ならず、惟だ義の在る所のみ」とある。

［校異］

○言不必主　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「言」を欠く。

【三十七】

○子曰、事君敬其事、而後其食。

南軒張氏曰、事君者、主於敬其事而已。官有尊卑、位有輕重、而敬其事之心則一也。後其食、猶後獲之意。然則爲貧而仕、則奈何。孔子嘗爲委吏矣、亦曰、會計當而已矣。嘗爲乘田矣、亦曰、牛羊茁壯長而已矣。蓋亦以敬其事爲主也。若曰爲貧而仕、食焉而已、遑恤其事、則失其義矣。此説能發言外之意。

［訓読］

○子曰く、君に事ふるには其の事を敬して、其の食を後にす。

南軒張氏曰く、君に事ふる者は、其の事を敬するを主とするのみ。官に尊卑有り、位に軽重有るも、其の事を敬するの心は則ち一なり。其の食を後にするは、猶ほ獲るを後にするの意なり。然らば則ち貧の為にして仕ふれば、則ち奈何。孔子嘗て委吏と為れるも、亦た曰く、会計当たるのみ、と。嘗て乗田と為れるも、亦た曰く、牛羊茁壮長のみ、と。蓋し亦た其の事を敬するを以て主と為すなり。若し貧の

為にして仕へ、焉を食ふのみ、其の事を恤(つつし)むに遑あらんやと曰へば、則ち其の義を失へり、と。此の説能く言外の意を発せり。

［語釈］

○南軒張氏曰～則失其義矣　『論語集註大全』衛霊公・37章。

○後獲　『論語』雍也・20章「難きを先にして獲るを後にす、仁と謂ふべし」。

【三十八】

○子曰、有教無類。

南軒張氏曰、人所稟之資雖有不同、然無有善惡之類一定而不可變者。蓋均是人也、原其降衷、何嘗不善。故聖人有教焉、所以反之於善也。教之則愚者可使之明、柔者可使之強。豈有氣質之不可變者乎。然堯舜之子不肖、則氣類又若有異、何也。蓋氣有可反之理、人有能反之道、而教有善反之功、其卒莫之能反者、則以自暴自棄而已。此説得之。

［訓読］

○子曰く、教へ有りて類無し。

南軒張氏曰く、人の稟くる所の資は同じからざる有りと雖も、然れども善悪の類の一定して変ずべからざる者有ること無し。蓋し均しく是れ人なれば、其の降衷を原(たつ)ぬれば、何ぞ嘗て善ならざらんや。故

に聖人焉に教ふること有るは、之を善に反(かへ)す所以なり。之に教ふれば則ち愚者は之をして明らかならしむべく、柔者は之をして強からしむべし。豈に気質の変ずべからざる者有らんや。然れども堯舜の子は不肖なれば、則ち気類に又た異なること有るがごとし、何ぞや。蓋し気に反すべきの理有り、人に能く反すの道有りて、教に善く反すの功有るも、其れ卒に之を能く反す者莫きは、則ち自暴自棄なるを以てのみ、と。此の説、之を得たり。

［語釈］

○南軒張氏曰～則以自暴自棄而已　『論語集註大全』衛霊公・38章。

【三十九】

○子曰、道不同、不相為謀。

志同則道合。不合則言不相入、徒費辭説耳。

［訓読］

○子曰く、道同じからざれば、相為に謀らず。

志同じければ則ち道合す。合せざれば則ち言相入らず、徒らに辞説を費すのみ。

【四十】

○子曰、辭達而已矣。

勉齋黄氏曰、此爲學者喜於工言辭者設。然其曰達而已矣、則非通於理者、亦不能達也。聖人之言未嘗有所偏也。此説得之。

［訓読］

○子曰く、辞は達せんのみ。

勉斎黄氏曰く、此れ学者の言辞を工みにするを喜ぶ者の為に設く。然れども其の達せんのみと曰ふは、則ち理に通ずる者に非ざれば、亦た達すること能はざればなり。聖人の言、未だ嘗て偏る所有らざるなり、と。此の説、之を得たり。

［語釈］

○勉齋黄氏曰～聖人之言未嘗有所偏也　『論語集註大全』衛霊公・40章。

【四十一】

○師冕見。及階。子曰、階也。及席。子曰、席也。皆坐。子告之曰、某在斯、某在斯。師冕出。子張問曰、與師言之道與。子曰、然。固相師之道也。

然者、謂與師言之道如此也。下文又曰固相師之道、則指出相字而特言之、以見瞽必有相之意。

［訓読］

○師冕見ゆ。階に及ぶ。子曰く、階なり、と。席に及ぶ。子曰く、席なり、と。皆坐す。子、之に告げて曰く、某斯に在り、某斯に在り、と。師冕出づ。子張問ひて曰く、師と言ふの道か。子曰く、然り。固より師を相(たす)くるの道なり。

然りとは、師と言ふの道の此くのごとくなるを謂ふ。下文に又た固より師を相くるの道と曰ふは、則ち相字を指し出だして特に之を言ひて、以て瞽を見ては必ず之を相くる有れ、との意なり。

［語釈］

○見瞽必有相　『論語』郷党・17章に「冕者と瞽者とを見ては、褻と雖も必ず貌を以てす」とある。

論語私存巻十五終

論語私存卷十六

季氏第十六

會稽季本箋釋

【一】

季氏將伐顓臾。冉有、季路見於孔子曰、季氏將有事於顓臾。孔子曰、求無乃爾是過與。夫顓臾、昔者先王以爲東蒙主。且在邦域之中矣。是社稷之臣也。何以伐爲。

孔子以顓臾不可伐、不必伐、不當伐、故曰何以伐爲。言伐顓臾之非義也。

［訓読］

季氏、将に顓臾を伐たんとす。冉有、季路、孔子に見えて曰く、季氏将に顓臾に事有らんとす、と。孔子曰く、求、乃ち爾是れ過てること無からんか。夫れ顓臾は、昔者(むかし)先王以て東蒙の主と為す。且つ邦域の中に在り。是れ社稷の臣なり。何を以て伐つことを為さん、と。

孔子、顓臾の伐つべからず、必ずしも伐たず、当に伐つべからざるを以ての故に曰く、何を以て伐つことを為さん、と。顓臾を伐つの非義を言ふなり。

冉有曰、夫子欲之。吾二臣者皆不欲也。孔子曰、求周任有言曰、陳力就列、不能者止。危而不持、顛而不

扶、則將焉用彼相矣。且爾言過矣。虎兕出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過與。

虎、兕、二獸名。龜、玉、二寶名。此責冉有之不能救正季氏也。出柙、以喩恣惡。毀櫝、以喩敗德。

［訓読］

冉有曰く、夫子之を欲す。吾れ二臣の者は、皆欲せざるなり、と。孔子曰く、求、周任言へること有り、曰く、力を陳(し)きて列に就き、能はざれば止む、と。危ふくして持せず、顛(くつがへ)りて扶けざれば、則ち將(は)た焉(いづく)んぞ彼の相を用ひん。且つ爾の言過てり。虎兕、柙より出で、亀玉、櫝中に毀たるるは、是れ誰の過ちぞや、と。

虎、兕は二獸の名なり。亀、玉は二宝の名なり。此れ冉有の季氏を救正すること能はざるを責むるなり。柙より出づとは、以て悪を恣にするを喩ふ。櫝に毀たるるは、以て徳を敗るを喩ふ。

冉有曰、今夫顓臾、固而近於費。今不取、後世必爲子孫憂。孔子曰、求君子疾夫舍曰欲之、而必爲之辭。丘也聞、有國有家者、不患寡而患不均。不患貧而患不安。蓋均無貧。和無寡。安無傾。夫如是。故遠人不服、則脩文德以來之。既來之、則安之。今由與求也、相夫子、遠人不服而不能來也。邦分崩離析而不能守也。而謀動干戈於邦内。吾恐季孫之憂、不在顓臾、而在蕭墻之内也。

冉有憂在子孫、功利之見也。孔子憂在百姓、仁義之心也。寡者、謂民離畔而加少也。此由不均所致。不均者、民之賦役。富者得以幸免、而貧者至於重煩。及貧者不勝而併歸富者、則富者亦貧矣。此均之所以

無貧也。如此而後民和。是和生於均矣。和則民皆來歸。即下文修文德以來之之意也。民貧而後寡。亦何患於民之貧。但使之常和、以安於久治、則邦不至於分崩離析。何有於傾。即下文既來之則安之之意也。文德者、使民均和而不貧也。久於其道以安之而已。治遠人與治國内之民、一道也。若因其不服而輒伐之、則尚武功而非文德矣。

［訓読］

冉有曰く、今夫れ顓臾は固くして費に近し。今取らざれば、後世必ず子孫の憂を為さん、と。孔子曰く、求、君子は夫の之を欲すと曰ふことを舍きて、必ず之が辞を為すことを疾む。丘や聞く、国を有ち家を有つ者は、寡きことを患へずして、均しからざるを患ふ。貧しきことを患へずして、安からざることを患ふ、と。蓋し均しければ貧しきこと無し。和らげば寡きこと無し。安ければ傾くこと無し。夫れ是くのごとし。故に遠人服せざれば、則ち文徳を脩めて以て之を来す。既に之を来せば、則ち之を安んず。今由と求とや、夫子を相(たす)け、遠人服さずして、来すこと能はざるなり。邦、分崩離析して、守ること能はざるなり。而して干戈を邦内に動かさんことを謀る。吾、季孫の憂は顓臾に在らずして、蕭牆の内に在らんことを恐る、と。

冉有の憂、子孫に在るは、功利の見なり。孔子の憂、百姓に在るは、仁義の心なり。寡とは、民離畔して加少なるを謂ふ。此れ均しからざるに由りて致す所なり。均しからずとは、民の賦役なり。富者は得て以て幸ひに免れて、貧者は煩を重ぬるに至る。貧者勝へざるに及びて、併びに富者に帰すれば、則

ち富者も亦た貧し。此れ均しきの貧無き所以なり。此くのごとくして而る後民和らぐ。是れ和は均に生ずるなり。和らげば則ち民皆来り帰す。即ち下文の文徳を修めて以て之を来すの意なり。民貧しくして後寡し。亦た何ぞ民の貧しきを患へんや。但だ之をして常に和らげ、以て久治に安んぜしむれば、則ち邦は分崩離析に至らず。何ぞ傾くこと有らんや。即ち下文の既に之を来せば、則ち之を安んず、の意なり。文徳とは民をして均しく和らげて貧しからざらしむ。其の道に久しくして以て之を安んずるのみ。遠人を治むると国内の民を治むるとは、一道なり。若し其の服さざるに因りて輒ち之を伐てば、則ち武功を尚びて文徳に非ざるなり。

【二】

○孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出。天下無道、則禮樂征伐自諸侯出。自諸侯出、蓋十世希不失矣。自大夫出、五世希不失矣。陪臣執國命、三世希不失矣。天下有道、則政不在大夫。天下有道、則庶人不議。禮樂征伐自天子出者、諸侯不敢專也。希不失者、諸侯至十世爲大夫所專、大夫至五世爲陪臣所專也。此章爲大夫專權者發。故總之曰、政不在大夫云。大夫則自諸侯而失矣。政在諸侯、庶人猶得議之。而況在大夫乎。

［訓読］

○孔子曰く、天下に道有れば、則ち礼楽征伐は天子より出づ。天下に道無ければ、則ち礼楽征伐は諸侯よ

り出づ。諸侯より出づれば、蓋し十世失はざること希なり。大夫より出づれば、五世失はざること希なり。陪臣国命を執れば、三世失はざること希なり。天下道有れば則ち政、大夫に在らず。天下道有れば、則ち庶人議せず、と。

礼楽征伐、天子より出づとは、諸侯敢へて専らにせざるなり。失はざること希なりとは、諸侯は十世に至りて大夫の専らにする所と為り、大夫は五世に至りて陪臣の専らにする所と為るなり。此の章、大夫の権を専らにする者の為に発す。故に之を総べて曰く、政、大夫に在らず、と云ふ。大夫は則ち諸侯よりして失ふ。政、諸侯に在れば、庶人すら猶ほ之を議するを得。而るを況んや大夫に在るをや。

【三】

○孔子曰、祿之去公室五世矣、政逮於大夫四世矣。故夫三桓之子孫微矣。

此爲三桓而發。蓋上章五世希不失之意也。○朱子或問之説、能發餘意。

［訓読］

○孔子曰く、禄の公室を去ること五世、政の大夫に逮ぶこと四世。故に夫の三桓の子孫は微なり、と。

此れ三桓の為にして発す。蓋し上章五世失はざること希なりの意なり。○朱子或問の説、能く余意を発す。

［語釈］

○朱子或問之説　朱熹『論語或問』巻十六に、「孔子の言ふ所は常理なり。猶ほ書に恵迪は吉、従逆は兇と言ひ、易に積善余慶、不善余殃と言ふがごとき者なり。気数舛戻すれば、則ち当に然るべくして然らざる者多し。孰れか得て之を斉へん。但だ儒者の守る所は、則ち亦た常理有るを知るのみ。其の成敗得失は、計る所に非ざる者有り。是を以て世故反覆し、百千万変すと雖も、而れども我に在る者は未だ嘗て其の守を失はざるなり。（中略）此れを以て之を論ずれば、則ち所謂常理は、又た未だ嘗て験あらずんばあらず。天定まれば人に勝つは、其れ此れを之れ謂ふか」とある。

【四】

○孔子曰、益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

此爲初學而發。故分節目言之。若論學有進益者、則曰以友輔仁、曰友其士之仁者而已矣。集註以損者三友分配三益、恐不免於牽強耳。

［訓読］

○孔子曰く、益者三友、損者三友。直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり、と。

此れ初学の為にして発す。故に節目を分けて之を言ふ。若し学に進益有るを論ずれば、則ち友を以て

仁を輔くと曰ひ、其の士の仁なる者を友とすと曰ふのみ。集註、損者三友を以て三益に分配するは、恐らくは牽強を免れざるのみ。

［語釈］

○集註以損者三友分配三益　『論語集註』巻一六・4章に「三者損益は、正に相反す」とある。

○以友輔仁　『論語』顔淵・24章。

○友士之仁者　『論語』衛霊公・9章。

【五】

○孔子曰、益者三樂、損者三樂。樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友、益矣。樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損矣。

樂、喜好也。此必爲樂遊樂者而發。損者三樂亦不必與三益之樂相配。饒雙峰曰、節禮樂三句都是天理一邊。驕樂三句都是人欲一邊。如此分別、已盡大意矣。

［訓読］

○孔子曰く、益者三楽、損者三楽。礼楽を節することを楽しみ、人の善を道ふことを楽しみ、賢友多きを楽しむは益なり。驕楽を楽しみ、佚遊を楽しみ、宴楽を楽しむは損なり、と。

楽は喜び好むなり。此れ必ず遊楽を楽しむ者の為にして発す。損者三楽も亦た必ずしも三益の楽と相

配せず。饒双峰曰く、礼楽を節するの三句は都て是れ天理の一辺なり。驕楽の三句は都て是れ人欲の一辺なり。此くのごとく分別すれば、已に大意を尽くす、と。

［語釈］

○饒雙峰曰～人欲一邊　『論語集註大全』巻一六・５章に同文が見える。

【六】

○孔子曰、侍於君子有三愆。言未及之而言、謂之躁。言及之而不言、謂之隱。未見顔色而言、謂之瞽。

此言侍于君子、言語當以時也。○勉齋黄氏曰、言有及、未及者。或數人侍坐、長者當先言。不言則及少者。或君子先有問、則承問者當先對。不以少長拘也。既有及、未及。而又有未見顔色者。雖及之而言、亦須觀長者顔色。或意他在、或有不樂、則亦未當言也。此説能盡其意矣。

［訓読］

○孔子曰く、君子に侍するに三愆有り。言未だ之に及ばずして言ふ、之を躁と謂ふ。言之に及びて言はず、之を隠と謂ふ。未だ顔色を見ずして言ふ、之を瞽と謂ふ、と。

此れ君子に侍するに、言語は当に時を以てすべきを言ふ。○勉斎黄氏曰く、言に及ぶ、未だ及ばざる者有り。或いは数人侍坐するに、長者当に先づ言ふべし。言はざれば則ち少者に及ぶ。或いは君子先づ問ふ有れば、則ち問を承くる者、当に先づ対ふべし。少長を以て拘せざるなり。既に及ぶ、未だ及ばざ

る有り。而して又た未だ顔色を見ざる者有り。之に及びて言ふと雖も、亦た須く長者の顔色を観るべし。或いは他を意ふ在り、或いは楽しまざる有れば、則ち亦た未だ当に言ふべからざるなり。此の説、能く其の意を尽くせり。

［語釈］

○勉齋黄氏曰～亦未当言也　『論語集註大全』季氏・６章に同文が見える。

【七】

○孔子曰、君子有三戒。少之時、血氣未定。戒之在色。及其壯也、血氣方剛。戒之在鬬。及其老也、血氣既衰。戒之在得。

凡人役於血氣、皆不知戒。學爲君子者、則當戒之。新安陳氏曰、三戒皆隨時。而就衆人所易犯者言也。

［訓読］

○孔子曰く、君子に三戒有り。少き時は血気未だ定まらず。之を戒むること色に在り。其の壮なるに及びてや、血気方に剛なり。之を戒むること鬬に在り。其の老に及びてや、血気既に衰ふ。之を戒むること得に在り、と。

凡そ人は血気に役せられ、皆戒むるを知らず。学びて君子と為る者は、則ち当に之を戒むべし。新安陳氏曰く、三戒は皆時に随ふ。而して衆人の犯し易き所の者に就きて言ふなり、と。

［語釈］

○新安陳氏～易犯者言也　『論語集註大全』季氏・7章に同文が見える。

【八】

○孔子曰、君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言。小人不知天命而不畏也。狎大人、侮聖人之言。

此章以畏天命爲主。大人、得天命之正者也。聖言、發天命之微者也。

［訓読］

○孔子曰く、君子に三畏有り。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れざるなり。大人に狎れ、聖人の言を侮る、と。

此の章、天命を畏るるを以て主と為す。大人は、天命の正を得る者なり。聖言は、天命の微を発(ひら)く者なり。

【九】

○孔子曰、生而知之者、上也。學而知之者、次也。困而學之、又其次也。困而不學、民斯爲下矣。

此所重在學。學則下愚可至於聖也。聖人之所至亦惟學耳。

［訓読］

○孔子曰く、生まれながらにして之を知る者は上なり。学びて之を知る者は次なり。困しみて之を学ぶ者は又た其の次なり。困しみて学ばざるは、民斯れを下と為す、と。

此れ重んずる所は学に在り。学べば則ち下愚も聖に至るべきなり。聖人の至る所も亦た惟だ学のみ。

【十】

○孔子曰、君子有九思。視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義。思非著意而求其通也。蓋心常存而明不蔽之意。知有所蔽則去其蔽而已。去其蔽則理無不得矣。思則誠之之功、故謂之思誠。○天下之道、理一分殊、而聖人之教甚約、言近指遠。如言忠、言恕、一言以蔽之、多不及其條目。此舉九思而言。季氏、陽貨篇、如此類者、蓋多有之意。聖人亦因事而發。如皐陶謨所陳九德之類、雖歷舉而不以爲煩。欲人於分殊中求理一也。九思之思、則理之所以爲一矣。

［訓読］

○孔子曰く、君子に九思有り。視るには明を思ひ、聽くには聡を思ひ、色には温を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敬を思ひ、疑ふには問を思ひ、忿るには難を思ひ、得るを見ては義を思ふ、と。

思は意を著けて其の通ぜんことを求むるに非ざるなり。蓋し心常に存して明、蔽はれざるの意なり。知、蔽はるる所有れば、則ち其の蔽を去るのみ。其の蔽を去れば則ち理得ざる無し。思は則ち之を誠にするの功、故に之を誠を思ふと謂ふ。○天下の道は理一分殊にして、聖人の教は甚だ約、近きを言ひて

遠きを指す。忠と言ひ、恕と言ふがごとく、一言以て之を蔽ひ、多く其の条目に及ばず。此れ九思を挙げて言ふ。季氏、陽貨篇、此くのごとき類の者、蓋し多く之が意有り。聖人も亦た事に因りて発す。皐陶謨に陳ぶる所の九徳の類のごとき、歴挙すと雖も而れども以て煩と為さず。人の分殊中に於いて理一を求むるを欲するなり。九思の思は、則ち理の一と為す所以なり。

［語釈］

○故謂之思誠　『孟子』離婁上に「是の故に誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり」とある。

○如言忠、言恕、一言以蔽之　『論語』里仁・15章。

○季氏、陽貨篇、如此類者、蓋多有之意　『論語』季氏・4章に「三友」、5章に「三楽」、6章に「三愆」、7章に「三戒」、8章に「三畏」、陽貨・8章に「六言六蔽」、16章に「三疾」などとあるのを指すか。

○如皐陶謨所陳九徳之類　『書経』皐陶謨に「皐陶曰く、都（ああ）、亦た行に九徳有り。亦た其の有徳を言ひ、乃ち言はん。曰く、載は采采、と。禹曰く、何ぞ、と。皐陶曰く、寛にして栗、柔にして立、愿にして恭、乱にして敬、擾にして毅、直にして温、簡にして廉、剛にして塞、彊にして義。彰かに厥の常有るは、吉なるかな」とある。

【十一】

○孔子曰、見善如不及、見不善如探湯。吾見其人矣。吾聞其語矣。隱居以求其志、行義以達其道。吾聞其語矣。未見其人也。

見善如不及、見不善如探湯、此好善惡惡之有誠。成德之事、美在其中者也。功業、文章、皆從此出。自其未用而言、則爲隱居求志。故隱居求志、不在好善惡惡之外。如顏子王佐之才、其所求之志不過如此。苟有用之者、必能達其所至之道。但明王不作、義不可行、無以試其所學耳。故曰未見其人也、傷時之意深矣。

［訓読］

○孔子曰く、善を見て及ばざるがごとくし、不善を見て湯を探るがごとくす。吾其の人を見る。吾、其の語を聞く。隱居して以て其の志を求め、義を行ひて以て其の道を達す。吾、其の語を聞く。未だ其の人を見ざるなり、と。

善を見ては及ばざるがごとくし、不善を見ては湯を探るがごとくすは、此れ善を好み悪を悪むの誠有るなり。成徳の事は、美、其の中に在る者なり。功業、文章は皆此れより出づ。其の未だ用ひられざるよりして言へば、則ち隱居と為りて志を求む。故に隱居して志を求むるは、善を好み悪を悪むの外に在らず。顏子のごときは王佐の才なるも、其の求むる所の志は此くのごときに過ぎず。苟も之を用ひる者有れば、必ず能く其の至る所の道に達す。但だ明王作(おこ)らず、義行ふべからず、以て其の学ぶ所を試みる

こと無きのみ。故に曰く、未だ其の人を見ざるなり、と。時を傷むの意深し。

【十二】

○齊景公有馬千駟。死之日、民無德而稱焉。伯夷、叔齊餓於首陽之下。民到于今稱之。其斯之謂與。

千駟者、千乘之馬。餓於首陽者、不食周粟也。○末句之上、當有誠不以富、亦祇以異八字。說見顏淵篇。

［訓読］

○斉の景公馬千駟有り。死するの日、民、徳として称すること無し。伯夷、叔斉、首陽の下に餓す。民、今に到るまで之を称す。其れ斯れを之れ謂ふか、と。

千駟とは、千乘の馬なり。首陽に餓すとは、周の粟を食らはざればなり。○末句の上、当に誠に富を以てせず、亦た祇だ以て異なるの八字有るべし。説は顔淵篇に見ゆ。

［語釈］

○説見顔淵篇　『論語私存』巻一二・10章参照。

【十三】

○陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰學詩乎。對曰、未也。不學詩、無以言。鯉退而學詩。他日又獨立。鯉趨而過庭。曰學禮乎。對曰未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。聞

斯二者。陳亢退而喜曰、問一得三。聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。

詩、禮、本孔子之雅言、非私教伯魚者也。遠其子、猶言不昵其子。陳亢之意、亦非謂孔子。故推而遠之、不以辭害意可也。

［訓読］

○陳亢伯魚に問ひて曰く、子も亦た異聞有るか、と。対へて曰く、未だし。嘗て独り立てり。鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を学びたるか、と。対へて曰く、未だし、と。詩を学ばざれば以て言ふこと無し、と。鯉退きて詩を学ぶ。他日又た独り立つ。鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、礼を学びたるか、と。対へて曰く、未だし、と。礼を学ばざれば以て立つこと無し、と。鯉退きて礼を学ぶ。斯の二者を聞く、と。陳亢退きて喜びて曰く、一を問ひて三を得たり。詩を聞き、礼を聞き、又た君子の其の子を遠ざくるを聞けり、と。

詩、礼は本より孔子の雅言にして、私かに伯魚に教ふる者に非ざるなり。其の子を遠ざくるは、猶ほ其の子を昵(ちか)づけざるを言ふがごとし。陳亢の意も亦た孔子を謂ふに非ず。故に推して之を遠ざくるは、辞を以て意を害せずして可なり。

【十四】

○邦君之妻、君稱之曰夫人。夫人自稱曰小童。邦人稱之曰君夫人。稱諸異邦曰寡小君。異邦人稱之亦曰君夫人。

厚齋馮氏曰、是時嫡妾不正。稱號不審。必夫子嘗言古禮如此。故記之。此説本孔註。

［訓読］

○邦君の妻、君、之を称して夫人と曰ふ。夫人自ら称して小童と曰ふ。邦人之を称して君夫人と曰ふ。諸（これ）を異邦に称して寡小君と曰ふ。異邦の人、之を称して亦た君夫人と曰ふ。

厚斎馮氏曰く、是の時、嫡妾正しからず。称号審らかならず。必ずや夫子嘗て古礼此くのごとしと言ふならん。故に之を記す、と。此の説、孔註に本づく。

［語釈］

○厚斎馮氏曰～故記之　『論語集註大全』巻一六・14章に同文が見える。

○此説本孔註　『論語注疏』巻八に「此の時に当り、諸侯の嫡妾正しからず。称号審らかならず。故に孔子、其の礼を正言するなり」とある。

論語私存巻十六　終